

(様式第8号)

事業報告書 (令和 3 年度)

事業名 ESD for 2030[®] 岡山ユネスコプログラム 2021

団体名 岡山ユネスコ協会

担当者名 井上 紘貴

※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

第22回「平和の鐘を鳴らそう！ in 長泉寺」

2021年8月15日（日）11時30分～14時、岡山市北区南方の長泉寺にて開催。会員、一般参加者、ボランティアを含めて約60名が参加。連日コロナ感染者が増加していた状況だったため、感染防止対策を取り開催した。「平和の鐘を鳴らそう」の後に、青木康嘉さんより「岡山県から送り出された開拓団～龍爪開拓団との交流～」というテーマで話題提供していただいた。その後音楽ユニット”あなたのそばにいたりいなかったり”の演奏、ミュージカル女優・清水ゆきさんの歌による「祈りのうた」が披露された。



平和の鐘をつく参加者

(様式第8号)



青木さんによる平和の話



祈りの音楽の演奏

②第23回「絵で伝えよう！私の町のたからもの絵画展」
2022年1月5日（水）～10日（月・祝）まで岡山県生涯学習センター1階展示スペースで

(様式第8号)

開催した。岡山市内の小中学校から 185 点の応募作品があり、その中から選定した入賞作品 64 点を展示。(学年ごとに優秀賞、優良賞、佳作を選定し、さらに日本ユネスコ協会連盟会長賞、岡山ユネスコ協会会長賞、三宅正勝賞の特別賞を選定)
例年実施していた入賞作品の表彰式は、昨年度に引き続いて今年度も特別賞 3 名だけの表彰式に縮小して 10 日に開催した。



「絵で伝えよう! わたしの町のたからもの」絵画展の様子



表彰式の様子

③SDGs パスポート

2021 年度も 2020 年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響で「SDGs パスポート交流会」も中止とした。一昨年度までの活動が難しい状況下ではあったが、4 名が 30 ボランを達成、35 名が 15 ボランを達成した。

2. ESD の視点を取り入れたところ、ESD の視点で見直したところ

「平和の鐘を鳴らそう in 長泉寺」では中高生にボランティアを呼びかけて、当日の運営とともに平和の話も聞いてもらうようにして若い世代に平和について考える場とした。

(今回 3 名)

「SDGs パスポート事業」に関しては、昨年度に引き続き、岡山では岡山経済同友会企業の協賛、連携を得て、岡山独自のパスポートを作成し、企業、学校ともに SDGs の理解、普及を促進した。

「絵で伝えよう私の町のたからもの絵画展」では募集要項に「SDGs の趣旨を踏まえて、教育活動、地域おこし、町おこしも対象にする」旨を追記した。

3. 取組の成果 (参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など)

※事業内容が ESD にどう貢献したか等を記入してください。

「平和の鐘を鳴らそう in 長泉寺」ではボランティアとして参加した中高生に感想文を寄稿していただき、ニュースレターにも掲載した。参加した中高生からは戦争を体験してなくても、過去の悲惨な事実を風化させずに将来世代に継承していく必要がある、平和宣言に記載されている内容を一人ひとり心がけることで、世界は少しずつ平和に近づくのではないかと感想を寄せ、しっかりした考えが伝わってきた。また今までは人前で話すことが苦手だったが、今回の体験を機に積極的にボランティア等に関わりたいと意気込んだ中学生もいて、自己変容にも結びつくきっかけになった。

SDGs パスポートについては、小・中・高校の児童・生徒がパスポートをボランティア活動への参加を促すとともに、福祉や環境、平和等の地域や世界が抱える課題を知り、自ら行動していけるように、一人ひとりの努力を記録し応援すべく取り組んできた。30 ボランを達成した生徒からはボランティア活動を通して、地域との繋がり、人と人との繋がりの大切さや素晴らしさを感じた、ボランティア活動は関わる人を笑顔にすることに気づいた、今後も積極的に関わっていきたい、などと感想を寄せてくれた。30 ボランを達成した中学生の感想文についてもニュースレターに掲載している。

「絵で伝えよう！私の町のたからもの絵画展」については SDGs の趣旨に沿った作品はまだ少なかった。

4. 今後の課題と展望

当協会を運営する理事会のメンバーが高齢化しているだけでなく、会員数自体も高齢化により減少傾向が進んでいるため、今後は高校生、大学生、30 代までの社会人を中心とした世代が参画できるよう、他団体との協働、企業との協働も強化していきたい。

また、広報の方法についてはホームページのみならず、Facebook、Twitter 等の SNS も活用していくほか、2022 年度についてはコロナ感染に留意しながら対面での学習機会を少しずつ増やしていきたい。